

にぎりえ

樋口一葉

青空文庫

一

おい木村さん^{しん}信さん寄つてお出^{いで}よ、お寄りといつたら寄つても
宜^いいではないか、又素通りで二葉^{ふたば}やへ行く気だらう、押^{おし}かけて行^ゆ
つて引ずつて来るからさう思ひな、ほんとにお湯^{ぶう}なら歸りにきつ
とよつておくれよ、嘘^{うそ}つ吐^つきだから何を言ふか知れやしないと店
先に立つて馴染^{なじみ}らしき突^つかけ下駄の男をとらへて小言^{こごと}をいふやう
な物の言ひぶり、腹も立たずか言訳しながら後刻^{のち}に後刻^{のち}に行^{ゆきす}
過^ぎるあとを、一寸^{ちよつと}舌打しながら見送つて後^{のち}にも無いもんだ来
る気もない癖に、本当に女房もちに成つては仕方がないねと店に

向つて鬨しきいをまたぎながら一人言ひとりごとをいへば、高たかちやん大分御述だいぶごじつか
懐いだね、何もそんなに案じるにも及ぶまい、焼棒杭やけぼうくいと何なにとやら、
又よりの戻る事もあるよ、心配まじなひしないで呪まじなひでもして待つが宜いいさ
と慰めるやうな朋輩ほうばいの口振くちぶり、力りきちやんと違つて私わたししには技倆うで
が無いからね、一人でも逃しては残念さ、私わたしのやうな運の悪
い者には呪も何も聞きはしない、今夜も又木戸番か、何たら事だ
面白くもないと肝癪かんしやくまぎれに店前みせさきへ腰をかけて駒下駄こまげたのう
しろでとんとんと土間を蹴けるは二十の上を七つか十か引眉毛ひきまゆげに
作り生際はへぎは、白粉おしろいべつたりとつけて唇は人喰ふ犬ごことの如く、かく
ては紅べにも厭いやらしき物なり、お力と呼ばれたるは中肉の背せい恰好かつかう
すらりつとして洗ひ髪の大嶋田おほしまだに新わらのさわやかさ、頸ゑりもと

ばかりの白粉も榮えなく見ゆる天然の色白をこれみよがしに乳の
 あたりまで胸くつろげて、烟草すばすば長烟管に立膝の無沙
 法さも咎める人のなきこそよけれ、思ひ切つたる大形の裕衣に
 ひっ引かけ帯は黒縹子と何やらのまがひ物、緋の平ぐけが背の処に
 見えて言はずと知れしこのあたりの姉さま風なり、お高といへる
 は洋銀の簪で天神がへしの髷の下を搔きながら思ひ出したやうに
 力ちやん先刻の手紙お出しかといふ、はあと氣のない返事をして、
 どうで来るのでは無いけれど、あれもお愛想さと笑つてゐるに、
 大底におしよ巻紙二尋も書いて二枚切手の大封じがお愛想
 で出来る物かな、そしてあの人は赤坂以来の馴染ではないか、少
 しやそつとの紛雑があろうとも縁切れになつてたまる物か、お前

の出かた一つでどうでもなるに、ちつとは精を出して取止めるやうに心がけたら宜よかる、あんまり冥利めうりがよくあるまいと言へば御親切に有がたう、御異見は承り置まして私わたしはどうもあんな奴は虫が好かないから、無き縁とあきらめて下さいと人事のやうにいへば、あきれたものだのと笑つてお前などはその我ままが通るから豪勢さ、この身になつては仕方がないと団扇うちはを取つて足元をあふぎながら、昔しは花よの言ひなし可笑をかしく、表を通る男を見かけて寄つてお出でと夕ぐれの店先にぎはひぬ。

店けんは二間間口の二階作り、軒には御神燈さげて盛り塩しほ景氣よく、空あきびん壇だんか何か知らず、銘酒あまた棚の上にならべて帳場めきたる処あほもみゆ、勝手元には七輪あほを煽ぐ音折々に騒がしく、女あるじ主が手づ

から寄せ鍋茶碗なべちやわんむし位はなるも道理ことわり、表にかかげし看板を見
 れば子細らしく御料理おんりようりとぞしたためける、さりとして仕出し頼み
 に行たらば何とかいふらん、俄ゆきに今日品切れもをかしかるべく、
 女ならぬお客様は手前店へお出かけを願ひますとも言ふにかた
 からん、世は御方便や商売がらを心得て口取り焼肴やきざかなとあつら
 へに來る田舎ものもあらざりき、お力といふはこの家の一枚看板や
 年は随一若けれども客を呼ぶに妙ありて、さのみは愛想の嬉しが
 らせを言ふやうにもなく我まま至極の身の振舞、少し容貌きりようの自
 慢かと思へば小面こづらが憎くいと蔭口かげぐちいふ朋輩もありけれど、交つきあ
 際つては存の外ほかやさしい処があつて女ながらも離れともない心持
 がする、ああ心とて仕方のないものの面ざしが何処どことなく冴さへて見

へるはあの子の本性が現はれるのであらう、誰しも新開へ這入るほどの者で菊の井のお力を知らぬはあるまじ、菊の井のお力か、お力の菊の井か、さても近來まれの拾ひもの、あの娘のお蔭で新開の光りが添はつた、抱へ主は神棚へささげて置いても宜いとて軒並びの羨やみ種になりぬ。

お高は往來の人のなきを見て、力ちゃんお前の事だから何があつたからとて気にしてもゐまいけれど、私は身につまされて源さんの事が思はれる、それは今の身分に落ぶれては根つから宜いお客ではないけれども思ひ合ふたからには仕方がない、年が違をが子があるがさ、ねへさうではないか、お内儀さんがあるといつて別れられる物かね、構ふ事はない呼出してお遣り、私しのなぞと

いったら野郎が根から心替りがして顔を見てさへ逃げ出すのだから仕方がない、どうで諦め物で別口へかかるのだがお前のはそれとは違ふ、了りようけん 簡一つでは今のお内儀かみさんに三下り半みくだはんをも遣られるのだけれど、お前は氣位が高いから源さんと一処ひとつにならうとは思ふまい、それだもの猶なほの事呼ぶ分に子細があるものか、手紙をお書き今に三河やの御用聞きが来るだろうからあの子僧に使ひやさんを為させるが宜いい、何なんの人お嬢様ではあるまいし御遠慮ばかり申まをしてなる物かな、お前は思ひ切りが宜いすぎるからいけないともかく手紙をやつて御覧、源さんも可愛さうだわなと言ひながらお力を見れば烟管掃除に余念のなきか俯うつむき向たるまま物いはず。

やがて雁首がんくびを奇麗に拭ふいて一服すつてポンとはたき、又すい

つけてお高に渡しながら氣をつけておくれ店先で言はれると人聞
きが悪いではないか、菊の井のお力は土方の手伝ひを情夫まぶに持つ
などと考かんちが違へをされてもならない、それは昔しの夢がたりさ、
何の今は忘れてしまつて源げんとも七とも思ひ出されぬ、もうその話
しは止め止めといひながら立あがる時表を通る兵児帯へこおびの一むれ、
これ石川さん村岡さんお力の店をお忘れなされたかと呼べば、い
や相変らず豪傑の聲がかり、素通りもなるまいとてずつと這入る
に、忽たちまち廊下**に**ばたばたといふ足おと、姉ねへさんお銚子と声をかけ
れば、お肴は何をと答ふ、三味さみの音景ね氣よく聞えて乱舞の足音こ
れよりぞ聞え初そめぬ。

さる雨の日のつれづれに表を通る山高帽子の三十男、あれなり
と捉とらずんばこの降りに客の足とまるまじとお力かけ出して袂たもとに
すがり、どうしても遣りませぬと駄々をこねれば、容きりよう貌ようよき身の
一徳、例になき子細らしきお客を呼入れて二階の六畳に三味線さみせんな
しのしめやかなる物語、年を問はれて名を問はれてその次は親も
との調べ、土族かといへばそれは言はれませぬといふ、平民かと
問へばどうござんしようかと答ふ、そんなら華族と笑ひながら聞
くに、まあさうおもふてゐて下され、お華族の姫ひいさま様が手づから
のお酌、かたじけなく御受けなされとて波々とつぐに、さりとは

ぶさはう

無左法な置つぎといふが有る物か、それは小笠原か、何流ぞといふに、お力流とて菊の井一家の左法、畳に酒のまする流氣りうぎもあれば、大平おほひらの蓋ふたであほらする流氣もあり、いやなお人にはお酌をせぬといふが大詰めきまつの極きまりでござんすとて臆おくしたるさまもなきに、客はいよいよ面白がりて履歴をはなして聞かせよ定めて凄すさましい物語があるに相違なし、唯ただの娘あがりとは思はれぬどうだとあるに、御覧なさりませ未だ鬢まびんの間に角も生へませず、そのやうに甲羅は経ませぬとてころろと笑ふを、さうぬけてはいけぬ、眞実の処を話して聞かせよ、素性が言へずは目的でもいへとて責める、むづかしいござんすね、いふたら貴君あなたびつくりなさりましたよ天下を望む大伴おほともの黒主くろぬしとは私わたしが事とていよいよ笑ふに、これはど

うもならぬそのやうに茶利ちやりばかり言はで少し眞実しんの処を聞かしてくれ、いかに朝夕てうせきを嘘うその中に送るからとてちつとは誠まことも交る筈はず、良人おととはあつたか、それとも親故ゆゑかと眞しんに成つて聞かれるにお力ちからがなしく成りて、私だとして人間でござんすほどに少しは心にしみる事もあります、親は早くになくなつて今は眞実ほんの手と足ばかり、こんな者なれど女房に持たうといふて下さるも無いではなけれど未だま良人をば持ませぬ、どうで下品に育ちました身なればこんな事して終るのでござんしよと投出したやうな詞ことばに無量の感があふれてあだなる姿の浮気らしきに似ず一節ふしさむろう様子のみゆるに、何も下品に育つたからとて良人の持てぬ事はあるまい、殊ことにお前のやうな別品べつぴんさむではあり、一足そくとびに玉たまの輿こしにも乗れさうな

もの、それともそのやうな奥様あつかひ虫が好かでやはり伝法でんぼう

肌はだの三尺帯が氣に入るかなと問へば、どうで其処そこらが落おちでござい

りましよ、此方こちらで思ふやうなは先様が嫌いやなり、来いといつて下さ

るお人の氣に入るもなし、浮氣のやうに思おぼしめし召めましようがその

日送りでござんすといふ、いやさうは言はさぬ相手のない事はあ

るまい、今店先で誰たれやらがよろしく言ふたと他の女ほかが言ことづて伝た

では無いか、いづれ面白い事があらう何とだといふに、ああ貴君あなた

もいたり穿せん索さくなさります、馴染はざら一面、手紙のやりとりは

反古ほごの取かへツこ、書けと仰おつしやれば起証でも誓紙でもお好み次

第めさし上ませう、女夫めをとやくそくななどと言つても此方こちで破るよりは

先方さきさま様の性根なし、主人もちなら主人が怕こわく親もちなら親の言ひ

なり、振向ひて見てくれねば此方こちらも追ひかけて袖を捉らへるに及ばず、それなら廃よせとてそれぎりになります、相手はいくらもあれども一生を頼む人が無いのでござんすとて寄る辺なげなる風ふう情ぜい、もうこんな話しは廃しにして陽氣にお遊びなさりまし、私は何も沈んだ事は嫌ひ、さわいでさわいで騒ぎぬかうと思ひますとて手を叩たたいて朋輩を呼べば力ちやん大分おしめやかだねと三十女の厚化粧が来るに、おいこの娘この可愛い人は何といふ名だと突だしぬけ然しに問はれて、はあ私はまだお名前を承りませんでしたといふ嘘をいふと盆が来るに焰魔えんま様へお参りが出来まいぞと笑へば、それだとして貴君今日お目にかかったばかりでは御坐りませんか、今改めて伺ひに出やうとしてゐましたといふ、それは何の事だ、

貴君のお名をさと揚げられて、馬鹿々々お力が怒るぞと大景氣、
無駄ばなしの取りやりに調子づいて旦那のお商売を当て見ませう
かとお高がいふ、何なにぶん分願ひますと手のひらを差出せば、いゑそ
れには及びませぬ人相で見まするとて如何いかにも落おちつきたる顔つき、
よせよせじつと眺められて棚おろしでも始まつてはたまらぬ、か
う見えても僕は官員だといふ、嘘を仰しやれ日曜のほかに遊んで
あるく官員様があります物か、力ちやんまあ何でいらつしやらう
といふ、化物ではいらつしやらないよと鼻の先で言つて分つた人
に御褒賞ごほうびだと懐ふところ中から紙入れを出せば、お力笑ひながら高ちや
ん失礼をいつてはならないこのお方は御大身ごたいしんの御華族様おしの
びあるきの御遊興さ、何の商売などがおありなさう、そんなの

では無いと言ひながら蒲団ふとんの上に乗せて置きし紙入れを取あげて、お相方あいかたの高尾にこれをばお預けなされまし、みなの方に祝義でも遣はしませうとて答へも聞かずんと引ひき出すを、客は柱に寄かかつて眺めながら小言もいはず、諸事おまかせ申すと寛大の人なり。

お高はあきれて力ちやん大底におしよといへども、何宜いいのさ、これはお前にこれは姉さんに、大きいので帳場の払ひを取つて残りみんなは一同にやつても宜いと仰しやる、お礼を申て頂いてお出でと蒔散まきちらせば、これをこの娘この十八番に馴れたる事とてさのみは遠慮もいふてはゐず、旦那よろしいのでございますかと駄目を押し、有がたうございますと搔かきさらつて行くうしろ姿、十九にし

ては更^ふけてるねと旦那どの笑ひ出すに、人の悪^{わる}い事を仰しやる
とてお力は起^たつて障子を明け、手摺^{てす}りに寄つて頭痛をたたくに、
お前はどうする金は欲しくないかと問はれて、私は別にほしい物
がござんした、此品^{これ}さへ頂けば何よりと帯の間から客の名刺をと
り出して頂くまねをすれば、何時^{いつ}の間に引出した、お取かへには
写真をくれとねだる、この次の土曜日に来て下されば御一処にう
つしませうとて帰りかかる客をさのみは止めもせず、うしろに廻
りて羽織をきせながら、今日は失礼を致しました、またのお出^{いで}を
待ますといふ、おい程の宜い事をいふまいぞ、空誓^{そらせいもん}文は御免だ
と笑ひながらさつさつと立つて階段^{はしご}を下りるに、お力帽子を手に
して後^{うしろ}から追ひすがり、嘘か誠か九十九夜^よの辛棒をなさりませ、

菊の井のお力は鑄型いがたに入つた女でござんせぬ、又形なりのかはる事も
 ありますといふ、旦那お歸りと聞て朋輩の女、帳場の女主あるじもか
 け出して唯今は有がたうと同音の御札、頼んで置いた車きが来しと
 て此処ここからして乗り出せば、家中うちぢう表へ送り出してお出を待ます
 るの愛想、御祝義の余光ひかりとしられて、後あとには力ちやん大明神様こ
 れにも有がたうの御札山々。

三

客は結城朝之助ゆふきとものすけとて、自ら道楽ものとは名のれども実体じつていな
 る処折々に見えて身は無職業妻子なし、遊ぶに屈強なる年頃なれ

ばにやこれを初めに一週には二三度の通ひ路、お力も何処となく
 懐^{なつ}かしく思ふかして三日見えねば文^{ふみ}をやるほどの様子を、朋輩^{ほうばい}の
 女子^{おんな}ども岡焼ながら弄^{から}かひては、力ちゃんお楽しみであらうね、
 おとこぶり
 男 振 はよし気前はよし、今にあの方は出世をなさるに相違な
 い、その時はお前の事を奥様とでもいふのであらうに今つから少
 し気をつけて足を出したり湯呑^{ゆのみ}であほるだけは廃^やめにおし人がら
 が悪いやねと言ふもあり、源さんが聞たらどうだらう気違ひにな
 るかも知れないとて冷評^{ひやかす}もあり、ああ馬車にのつて来る時都合
 が悪いから道普請^{みちずけ}からして貰^{もら}いたいね、こんな溝板^{どぶいた}のがたつ
 く様な店先へそれこそ人がらが悪^{わる}くて横づけにもされないではな
 いか、お前方ももう少しお行義を直してお給仕に出られるやう心

がけておくれとずばずばといふに、エエ憎くらしいそのものいひ
 を少し直さずは奥様らしく聞へまい、結城さんが来たら思ふさま
 いふて、小言をいはせて見せようとて朝之助の顔を見るよりこん
 な事を申てゐまする、どうしても私共の手にのらぬやんちやなれ
 ば貴君あなたから叱しかつて下され、第一湯呑みで呑むは毒でござりましたよ
 と告つげ口するに、結城は真面目になりてお力酒だけは少しひかへ
 るとの厳命、ああ貴君のやうにもないお力が無理にも商売してゐ
 られるはこの力ちからと思し召さぬか、私に酒氣さかけが離れたら坐敷は三さん
 昧いどう堂のやうに成りませう、ちつと察して下されといふに成程々
 々として結城は二言ごんといはざりき。

或る夜の月に下坐敷したへは何処やらの工場の一連むれ、丼どんぶりたいて

甚九じんくかつぽれの大騒ぎに大方の女子おなごは寄集まつて、例の二階の小坐敷には結城とお力の二人ぎりなり、朝之助は寝ころんで愉快らしく話を仕かけるを、お力はうるさうに生返事をして何やらん考へてゐる様子、どうかしたか、又頭痛でもはじまつたかと聞かれて、何頭痛も何もしませぬけれど頻しきりに持病が起つたのですといふ、お前の持病は肝かん癩しやくか、いいえ、血の道か、いいえ、それでは何だと聞かれて、どうも言ふ事は出来ませぬ、でも他ほかの人ではなし僕ではないかどんな事でも言ふて宜さそうなもの、まあ何の病気だといふに、病気ではござんせぬ、唯こんな風になつてこんな事を思ふのですといふ、困つた人だな種いろ々秘密ひみつがあると見える、お父とつさんはと聞けば言はれませぬといふ、お母つかさんはと

問へばそれも同じく、これまでの履歴はといふに貴君には言はれぬといふ、まあ嘘うそでも宜いいさよしんば作り言にしろ、かういふ身の不ふしあはせ幸だとか大底の女ひとはいはねばならぬ、しかも一度や二度あふのではなしその位の事を発表しても子細はなからう、よし口に出して言はなからうともお前に思ふ事がある位めくら按摩あんまに探ぐらせても知れた事、聞かずとも知れてゐるが、それをば聞くのだ、どつち道同じ事だから持病といふのを先きに聞きたいといふ、およしなさいまし、お聞きになつてもつまらぬ事でござんすとお力は更に取あはず。

折から下坐敷より杯盤を運びきし女の何やらお力に耳打してともかくも下までお出いでよといふ、いや行きたくないからよしておく

れ、今夜はお客が大変に酔ひましたからお目にかかつたとお話
しも出来ませぬと断つておくれ、ああ困つた人だねと眉まゆを寄せる
に、お前それでも宜いいのかへ、はあ宜いいのさと膝ひざの上で撥ばちを弄あそ
べば、女は不思議さうに立つてゆくを客は聞きくまして笑ひながら
御遠慮には及あばない、逢あつて来たら宜いからう、何もそんなに体裁
には及あばぬではないか、可愛すもどい人を素戾すもどしもひどからう、追おひか
けて逢あふが宜いい、何なら此処へでも呼び給へ、片隅へ寄つて話し
の邪魔はすまいからといふに、串じようだん談まをしはぬきにして結城さん貴
君に隠かくしたとて仕方がないから申まをしますが町内で少しは巾はばもあつ
た蒲団やの源七といふ人、久しい馴染なじみでござんしたけれど今は見
るかげもなく貧乏して八百屋の裏の小さな家うちにまいまいつぶろの

様になつていまする、女房にようぼもあり子供もあり、私がやうな者に
 逢としひに来る歳ではなけれど、縁があるか未いまだに折ふし何のかのと
 いつて、今も下坐敷へ来たのでござんせう、何も今さら突出すと
 いふ訳ではないけれど逢つては色々面倒な事もあり、寄らず障さわら
 ず歸した方が好いのでござんす、恨まれるは覚悟の前、鬼だとも
 蛇だとも思ふがようござりますとて、撥なぶを畳に少し延びあがりて
 表を見おろせば、何と姿が見えるかと廻なぶる、ああもう歸つたと見
 えますとて茫然ほんとしてゐるに、持病といふのはそれかと切込まれ
 て、まあそんな処でござんせう、お医者様でも草津の湯でもと薄う
 淋すさびしく笑つてゐるに、御本尊を拝みたいな俳やくしや優で行つたら誰
 れの処だといへば、見たら吃驚びっくりでござりませう色の黒い背の高

い不動さまの名代といふ、では心意気かと問はれて、こんな店で

身しんしやう上はたくほどの人、人の好いばかり取得とては皆無でござ

んす、面白くも可笑をかしくも何ともない人といふに、それにお前は

どうして逆のぼ上せた、これは聞き処と客は起かへる、大方逆のぼせう上性

なのでござんせう、貴君の事をもこの頃は夢に見ない夜よはござん

せぬ、奥様のお出来なされた処を見たり、ぴつたりと御出のとま

つた処を見たり、まだまだ一層もつとかなしい夢を見て枕まくらがみ紙がびつ

しよりに成つた事もござんす、高ちやんなぞは夜る寐ねるからとて

も枕を取るよりはやく鼾いびきの声தாகく、宜いい心持らしいがどんなに

浦山うらやましうござんせう、私はどんな疲れた時でも床へ這入はいると目

が冴さへてそれはそれは色々の事を思ひます、貴君は私に思ふ事が

あるだらうと察してゐて下さるから嬉しいけれど、よもや私が何を
おもふかそれこそはお分りに成りますまい、考へたとて仕方が
ない故人ゆゑ前ばかりの大陽氣、菊の井のお力は行ぬけゆきの締りなしだ、
苦勞といふ事はしるまいと言ふお客様もござります、ほんに因果
とでもいふものか私が身位かなしい者はあるまいと思ひますとて
潜さめざめ然とするに、珍らしい事陰氣のはなしを聞かせられる、慰め
たいにも本末もとすゑをしらぬから方ほうがつかぬ、夢に見てくれるほど実
があらば奥様にしてくれる位いひそうな物だに根つからお声がか
りも無いはどういふ物だ、古風に出るが袖そでふり合ふもさ、こんな
商売を嫌いやだと思ふなら遠慮なく打明けばなしを為するが宜い、僕は
又お前のやうな氣では寧いっそ氣樂だとかいふ考へで浮いて渡る事かと

思つたに、それでは何か理屈があつて止むを得ずといふ次第か、
苦しからずは承りたい物だといふに、貴君には聞いて頂かうとこ
の間から思ひました、だけれども今夜はいけませぬ、何故々々、
何故でもいけませぬ、私が我まま故、申まいと思ふ時はどうして
も嫌やでござんすとて、ついと立つて椽がはへ出るに、雲なき空
の月かげ涼しく、見おろす町にからころと駒下駄の音さして行か
ふ人のかげ分明なり、結城さんと呼ぶに、何だとして傍へゆけば、
まあ此処へお座りなさいと手を取りて、あの水菓子屋で桃を買ふ
子がござんしよ、可愛らしき四つばかりの、彼子が先刻の人ので
ござんす、あの小さな子心にもよくよく憎くいと思ふと見えて
私の事をば鬼々といひまする、まあそんな悪者に見えまするかと

て、空を見あげてホツと息をつくさま、堪へかねたる様子は五音の調子にあらはれぬ。

四

同じ新開の町はづれに八百屋と髪結床が庇合のやうな細露路、雨が降る日は傘もさされぬ窮屈さに、足もととは処々
 に溝板の落し穴あやふげなるを中にして、両側に立てたる棟
 割長屋、突当りの芥溜わきに九尺二間の上り框朽ちて、雨戸
 はいつも不用心のたてつけ、さすがに一方口にはあらで山の手
 の仕合は三尺ばかりの椽の先に草ぼうぼうの空地、それが端

を少し囲つて青紫蘇、あをぢそゑぞ菊、隠元豆の蔓つるなどを竹のあら垣からに搦
ませたるがお力が処縁の源七が家なり、女房はお初はつといひて二十
八か九にもなるべし、貧にやつれたれば七つも年の多く見えて、
お齒黒はぐろはまだらに生へ次第の眉毛まゆげみるかげもなく、洗ひざらしの
鳴海なるみの裕衣ゆかたを前と後を切りかへて膝のあたりは目立ぬやうに小針
のつぎ当、狭帯せまおびきりりと締めて蟬せみ表おもての内職、盆前よりかけ
て暑さの時分をこれが時よと大汗になりての勉強せはしなく、揃そろ
へたる簾とうを天井から釣下げて、しばしの手数も省かんとて数のあ
がるを楽しみに脇目わきめもふらぬ様あはれなり。もう日が暮れたに太た
吉きちは何故かへつて来ぬ、源さんも又何処どこを歩いてゐるかしらんと
て仕事を片づけて一服吸つけ、苦勞らしく目をぱちつかせて、更

に土瓶どびんの下を穿ほくり、蚊いぶし火鉢に火を取分けて三尺の椽もに持もちだし、拾ひ集めの杉の葉を冠かぶせてふうふうと吹立れば、ふす
 ふすと烟けぶりたちのぼりて軒場のきばにのがれる蚊の声すさまじし、太吉はが
 たがたと溝板の音をさせて母かかさん今戻つた、お父さんとつも連れて来
 たよと門かどぐち口から呼よび立つるに、大層おそいではないかお寺の山へ
 でも行ゆきはしないかとどの位案じたらう、早くお這入はいりといふに太吉
 を先に立てて源七は元氣なくぬつと上る、おやお前さんお歸りか、
 今日はどうなに暑かつたでせう、定めて歸りが早からうと思つて
 行水を沸かして置ました、ざつと汗を流したらどうでござんす、
 太吉もお湯ぶうに這入なといへば、あいと言つて帯を解く、お待お待、
 今加減を見てやるとて流しもとに盥たらいを据へて釜かまの湯を汲くみ出し、

かき廻して手拭てぬぐひを入れて、さあお前さんこの子をもいれて遣つて下され、何をぐたりと為してお出いでなさる、暑さにでも障りはしませぬか、さうでなければ一杯あびて、さつぱりに成つて御膳あがれ、太吉が待つてゐますからといふに、おおさうだと思ひ出したやうに帯を解いて流しへ下りれば、そぞろに昔しの我身が思はれて九尺二間の台処で行水つかふとは夢にも思はぬもの、ましてや土方の手伝ひして車の跡押あとおしにと親は生うみつけても下さるまじ、あつまらぬ夢を見たばかりにと、ちつと身にしみて湯もつかはねば、父とつちやん脊中せなか洗つておくれと太吉は無心に催促する、お前さん蚊が喰ひますから早々さつさつとお上りなされと妻も氣をつくるに、おいおいと返事しながら太吉にも遣はせ我れも浴びて、上にあが

れば洗ひ晒せしきばさばの裕衣を出して、お着かへなさいましと
 言ふ、帶まきつけて風の透く処へゆけば、妻は能代の膳のはげか
 かりて足はよろめく古物に、お前の好きな冷奴にしましたと
 て小井に豆腐を浮かせて青紫蘇の香たかく持出せば、太吉は
 何時しか台より飯櫃取おろして、よつちよいよつちよい「は底
 本では「よつちよいよつちよい」と担ぎ出す、坊主は我れが傍
 に来いとて頭を撫でつつ箸を取るに、心は何を思ふとなけれど舌
 に覚えの無くて咽の穴はれたる如く、もう止めにとて茶碗
 を置けば、そんな事があります物か、力業をする人が三膳の
 御飯のたべられぬと言ふ事はなし、気合ひでも悪うござんすか、
 それとも酷く疲れてかと問ふ、いや何処も何とも無いやうなれど

唯^{ただ}たべる気にならぬといふに、妻は悲しさうな目をしてお前さん
又例のが起りましたらう、それは菊の井の鉢^{はちざかな}肴^{うま}は甘くもあり
ましたらうけれど、今の身分で思ひ出した処が何となりまする、
先は売物買物お金さへ出来たら昔しのやうに可愛がつてもくれま
せう、表を通つて見ても知れる、白粉^{おしろい}つけて美^い衣類^{きもの}きて迷ふ
て来る人を誰^たれかれなしに丸めるがあの人達が商売、ああ我^おれが
貧乏に成つたから構^{かま}いつけてくれぬなど思へば何の事なく済^すまし
よう、恨みにでも思ふだけがお前さんが未練でござんす、裏町の
酒屋の若い者知つてお出^{いで}なさらう、二葉やのお角^{かく}に心^{しん}から落込^おん
で、かけ先を残らず使ひ込み、それを埋めやうとて雷神^{らいじん}虎^{とら}が盆^ぼ
筵^{んごぎ}の端^{はし}についたが身の詰り、次第に悪^しるい事が染^しみて終^{しま}ひには

土蔵やぶりまでしたさうな、当時男は監獄入りしてもつそう飯たべていやうけれど、相手のお角は平氣なもの、おもしろ可笑しく世を渡るに咎める人なく美事繁昌してゐます、あれを思ふに商売人の一徳、だまされたは此方の罪、考へたとて始まる事ではござんせぬ、それよりは氣を取直して稼業に精を出して少しの元手も拵へるやうに心がけて下され、お前に弱られては私もこの子もどうする事もならず、それこそ路頭に迷はねば成りませぬ、男らしく思ひ切る時あきらめてお金さへ出来ようならお力はおろか小紫でも揚卷でも別荘こしらへて困うたら宜うござりましよ
う、もうそんな考へ事は止めにして機嫌よく御膳あがつて下され、坊主までが陰氣らしい沈んでしまいましたといふに、みれば茶碗

と箸を其処そこに置いて父と母との顔をば見くらべて何とは知らず氣になる様子、こんな可愛い者さへあるに、あのやうな狸たぬきの忘れられぬは何の因果かと胸の中かき廻されるやうなるに、我れながら未練ものめと叱りしかつけて、いや我れだとしてその様に何時いつまでも馬鹿ではいぬ、お力などと名ばかりもいつてくれるな、いはれると以前もとの不出来ふでしを考へ出していよいよ顔があげられぬ、何のこの身になつて今更何をおもふ物か、食めしがくへぬとてもそれは身体からだの加減であらう、何も格別案じてくれるには及ばぬ故小僧も十分にやつてくれとて、ころりと横になつて胸のあたりをはたはたと打あふぐ、蚊遣かやりの烟けむりにむせばぬまでも思ひにもえて身の暑げなり。

五

誰れ^た白鬼^{しろおに}とは名をつけし、無間地獄^{むげん}のそこはかとなく景色づ
くり、何処^たにからくりのあるとも見えねど、逆さ落しの血の池、
借金^{きん}の針の山に追ひのぼすも手の物ときくに、寄つてお出でよと
甘^{あま}へる声も蛇くふ雉子^{きぎす}と恐ろしくなりぬ、さりとも胎内^{たうち}十月^{とつき}の同
じ事^{こと}して、母の乳房^{ちち}にすがりし頃は手打^{てうち}々々あわわの可愛^{かわい}げに、
紙幣^{さつ}と菓子との二つ取りにはおこしをおくれと手を出したる物な
れば、今の稼業^{かせぎ}に誠はなくとも百人の中の一人に真からの涙をこ
ぼして、聞いておくれ染物^{ぞめ}やの辰^{たつ}さんが事を、昨日^{きのふ}も川田^{かわだ}やが店
でおちやつぴいのお六^{むさけ}めと悪戯^{ふざけ}まわして、見たくもない往来^{わらい}へま

で担ぎ出して打ちつ打たれつ、あんな浮いた了りようけん簡で末が遂げられやうか、まあ幾歳だとおもふ三十は一昨年おとし、宜い加減に家でも拵へる仕覚しがくをしておくれと逢ふ度あに異見をするが、その時限りおいおいと空返事そらして根つから氣にも止めてはくれぬ、父さんとつは年をとつて、母さんははと言ふは目の悪い人だから心配をさせないやうに早く締つてくれれば宜いが、私わたしはこれでもあの人の半纏はんてんをば洗濯して、股引ももひきのほころびでも縫つて見たいと思つてゐるに、あんな浮いた心では何時引取つてくれるだらう、考へるとつくづく奉公が嫌いやになつてお客を呼ぶに張合もない、ああくさくさするとて常は人をも欺だます口で人の愁つらきを恨みの言葉、頭痛を押へて思案に暮れるもあり、ああ今日は盆の十六日だ、お焰魔えんま

様へのお参りに連れ立つて通る子供達の奇麗な着物きて小遣こづかひ
 もらつて嬉しさうな顔してゆくは、定めて定めて二人揃そろつて甲斐かひ
 性せいのある親をば持つてゐるのである、私が息子の与太郎よたろうは今日の
 休みに御主人から暇が出て何処へ行ゆつてどんな事して遊ぼうとも
 定めし人うらやまが羨しかろ、父ととさんは呑のみぬけ、いまだに宿とても定まる
 まじく、母はこんな身になつて恥かしい紅白粉、よし居処が分つ
 たとてあの子は逢まひに来てもくれまじ、去年むかふしま向島の花見の時
 女房づくりして丸まるまげ髷に結つて朋輩ほうばいと共に遊びあるきしに土手
 の茶屋であの子に逢なりつて、これこれと声をかけしにさへ私の若く
 成なりしに呆あきれて、お母つかさんでござりますかと驚きし様子、ましてや
 この大島田に折ふしは時好じこうの花はな簪はなかんざしさしひらめかしてお客を捉と

らへて串談じようだんいふ処を聞かば子心には悲しくも思ふべし、去年

あひたる時今は駒形こまかたの蠟燭ろうそくやに奉公してゐます、私はどん

な愁つらき事ありとも必らず辛抱しとげて一人前の男になり、父さとと

んをもお前をも今に樂をばお為させ申ます、どうぞそれまで何なり

と堅氣かたぎの事をして一人で世渡りをしてゐて下され、人の女房にだ

けはならずにゐて下されと異見を言はれしが、悲しきは女子をなごの身

の寸燐まつちの箱はりして一人ひとりぐち口過しがたく、さりとて人の台処を這

ふも柔弱からだの身体なれば勤めがたくて、同じ憂うき中にも身の樂なれ

ば、こんな事して日を送る、夢さら浮いた心では無けれど言甲斐いひがひ

のないお袋とあの子は定めし爪つまはじきするであらう、常は何とも

思はぬ島田が今日ばかりは恥かしいと夕ぐれの鏡の前に涕なみだぐむも

あるべし、菊の井のお力とても悪魔の生れ替りにはあるまじ、さ
 る子細あればこそ此^{ここ}処の流れに落こんで嘘^{うそ}のありたけ串談にその
 日を送つて、情^{なさけ}は吉野紙^{よしのがみ}の薄物に、螢^{ほたる}の光ぴつかりとするばか
 り、人の涕は百年も我まんして、我ゆゑ死ぬる人のありとも御愁
 傷さまと脇^{わき}を向くつらさ他^{よそめ}処目も養ひつらめ、さりともし折ふしは
 悲しき事恐ろしき事胸にたたまつて、泣くにも人目を恥れば二階
 座敷の床の間に身を投^{なげ}ふして忍^ねび音の憂き涕、これをば友朋輩に
 も洩^もらさじと包むに根^{こんぜう}生のしつかりした、氣のつよい子といふ
 者はあれど、障れば絶ゆる蛛^{くも}の糸のはかない処を知る人はなかり
 き、七月十六日の夜^よは何処の店にも客^{きやくじん}人入^{いりこ}込みて都々^{どどい}一端^{はうた}歌
 の景氣よく、菊の井の下座敷^{した}にはお店^{たなもの}者五^{たなもの}六人寄集まりて調子

の外れし紀伊きいの国くに、自まも恐ろしき 朧間どうまへ声かすみころもゑもんぎに霞の衣衣紋坂
と気取るもあり、力ちやんはどうした心意氣を聞かせないか、や
つたやつたと責められるに、お名はささねどこの坐の中にと普ついで
とほり通とほりの嬉しがらせを言つて、やんややんやと喜ばれる中から、我
恋は細谷川ほそだにがはの丸木橋わたるにや怕こわし渡らねばと謳うたひかけしが、
何をか思ひ出したやうにああ私は一寸無礼ちよつとしつれいをします、御免なさ
いよとて三味線さみせんを置いて立つに、何処へゆく何処へゆく、逃げて
はならないと坐中の騒さわぐに照てちやん高さん少し頼むよ、直じき帰る
からとてずつと廊下へ急ぎ足いに出いでしが、何をも見かへらず店口か
ら下駄を履いて筋向ふの横町の闇やみへ姿をかくしぬ。

お力は一散に家を出て、行かれる物ならこのままに唐天竺からてんぢくの

果までも行つてしまいたい、ああ嫌だ嫌だ嫌だ、どうしたなら人の声も聞えない物の音もしない、静かな、静かな、自分の心も何もぼうつとして物思ひのない処へ行かれるであらう、つまらぬ、くだらぬ、面白くない、情ない悲しい心細い中に、何時まで私は止められてゐるのかしら、これが一生か、一生がこれか、ああ嫌だ嫌だと道端の立木へ夢中に寄かかつて暫時そこに立どまれば、渡るにや怕し渡らねばと自分の謳ひし声をそのまま何処ともなく響いて来るに、仕方がないやつぱり私も丸木橋をば渡らずはなるまい、父さんととも踏かへして落ておしまいなされ、祖父さんおぢいも同じ事であつたといふ、どうで幾代もの恨みを背負せおうて出た私なれば為するだけの事はしなければ死んでも死なれぬのであらう、情ないと

ても誰^たれも哀れと思ふてくれる人はあるまじく、悲しいと言へば
商売がらを嫌ふかと一ト口に言はれてしまう、ゑゑどうなりとも
勝手になれ、勝手になれ、私には以上考へたとて私の身の行き方
は分らぬなれば、分らぬなりに菊の井のお力を通してゆかう、人
情しらず義理しらずかそんな事も思ふまい、思ふたとてどうなる
物ぞ、こんな身でこんな業^{げうてい}体で、こんな宿^{すくせ}世で、どうしたから
とて人並みでは無いに相違なければ、人並の事を考へて苦勞する
だけ間違ひであろ、ああ陰氣らしい何だとしてこんな処^{とこ}に立つてゐ
るのか、何しにこんな処^{とこ}へ出て来たのか、馬鹿らしい氣違じみた、
我身ながら分らぬ、もうもう販^{かへ}りませうとて横町の闇をば出はな
れて夜店の並ぶにぎやかなる小路^{こうぢ}を氣まぎらしにとぶらぶら歩る

けば、行かよふ人の顔小さく小さく擦れ違ふ人の顔さへも遙^{はるか}とほ
 くに見るやう思はれて、我が踏む土のみ一丈も上にあがりゐる如^{ごと}
 く、がやがやといふ声は聞ゆれど井の底に物を落したる如き響き
 に聞なされて、人の声は、人の声、我が考へは考へと別々に成り
 て、更に何事にも氣のまぎれる物なく、人立^{ひとたち}おびただしき^{めをと}夫婦
 あらそひの軒^{のき}先^{さき}などを過ぐるとも、唯^{ただ}我れのみは広野の原の冬
 枯れを行くやうに、心に止まる物もなく、氣にかかる景色にも覺
 えぬは、我れながら酷^{ひど}く逆上^{のぼ}て人心のないのにと覺^{おぼ}束^{つか}なく、氣
 が狂ひはせぬかと立どまる途端、お力何処へ行くとして肩を打つ人
 あり。

六

十六日は必らず待まする来て下されと言ひしをも何も忘れて、

今まで思ひ出しもせざりし結城の朝之助に不図^{ふとであひ}出合て、あれと驚

きし顔つきの例に似合ぬ狼狽^{あわて}かたがをかしきとて、からからと男

の笑ふに少し恥かしく、考へ事をして歩いてゐたれば不意のやう

に惶^{あは}ててしまいました、よく今夜は来て下さりましたと言へば、

あれほど約束をして待てくれぬは不^ふ心^{しん}中^{ちゆう}とせめられるに、何な

りと仰^{おつ}しやれ、言訳は後^{のち}にしまするとて手を取りて引けば弥次馬

がうるさいと気をつける、どうなり勝手に言はせませう、此方^{こちら}は

此方^{ひとなか}と人中^{ひとなか}を分けて伴ひぬ。

下座敷はいまだに客の騒ぎはげしく、お力の中座をしたるに不
興きようして喧やかしかりし折から、店口にておやお販かへりかの声を聞くよ
り、客を置おきりに中坐するといふ法があるか、販かへつたらば此処へ
来い、顔を見ねば承知せぬぞと威張たてるを聞流ごしゆしに二階の座敷
へ結城を連れあげて、今夜も頭痛かがするので御酒の相手は出来ま
せぬ、大勢の中に居れば御酒の香かに酔よふて夢中になるも知れませ
ぬから、少し休んでその後のちは知らず、今は御免なさりませと断り
を言ふてやるに、それで宜いのか、怒りはしないか、やかましく
なれば面倒であらうと結城が心づけるを、何のお店たなものの白瓜しろうり
がどんな事を仕出しだしませう、怒るなら怒れでござんすとて小女こをんな
に言ひつけてお銚子の支度、来るをば待かねて結城さん今夜は私

に少し面白くない事があつて気が變つてゐまするほどにその氣で
附合てゐて下され、御酒を思ひ切つて呑^のみまするから止めて下さ
るな、酔ふたらば介抱して下されといふに、君が酔つたを未^{いま}だに
見た事がない、氣が晴れるほど呑むは宜^いいが、又頭痛がはじまり
はせぬか、何がそんなに逆^{げきり}鱗にふれた事がある、僕らに言つて
は悪^あるい事かと問はれるに、いゑ貴君^{あなた}には聞て頂きたいのでござ
んす、酔ふと申^{まを}しますから驚いてはいけませぬと嬌^{にっこり}然として、大
湯呑を取よせて二三杯は息をもつかざりき。

常にはさのみに心も留^{とど}まらざりし結城の風采^{やうす}の今宵^{こよひ}は何となく
尋常^{なみ}ならず思はれて、肩^{かた}巾^{はば}のありて背のいかにも高き処^{ところ}より、
落つて物をいふ重やかなる口振り、目つきの凄^{すこ}くて人を射るや

うなるも威嚴の備はれるかと嬉しく、濃き髪のを短かく刈あげ
 て頸^{ゑりあし}足のくつきりとせしなど今更のやうに眺られ、何をうつと
 りしてゐると問はれて、貴君のお顔を見てゐますのさと言へば、
 此奴^{こやつ}めがと睨^{にら}みつけられて、おお怕^{こわ}いお方と笑つてゐるに、串^{じやう}
 談^{だん}はのけ、今夜は様子が唯でない聞たら怒るか知らぬが何か事
 件があつたかととふ、何しに降つて湧^わいた事もなければ、人との
 紛^{いざ}雑などはよし有つたにしろそれは常の事、気にもかからねば何
 しに物を思ひませう、私の時より気まぐれを起すは人のするので
 は無くて皆心がらの浅ましい訳がござんす、私はこんな賤^{いや}しい身
 の上、貴君は立派なお方様、思ふ事は反^{うらはら}対にお聞きになつても
 汲^くんで下さるか下さらぬか其^{そこ}処^こほどは知らねど、よし笑ひ物にな

つても私は貴君に笑ふて頂きたく、今夜は残らず言ひまする、まあ何から申さう胸がもめて口が利きかれぬとて又もや大湯呑に呑む事さかなり。

何より先に私が身の自墮落を承知してゐて下され、もとより箱入りの生きむすめ娘ならねば少しは察してもゐて下さろうが、口奇麗な事はいひますともこのあたりの人に泥の中の蓮はすとやら、悪業わるさに染まらぬ女子おなごがあらば、繁昌どころか見に来る人もあるまじ、貴君は別物、私が処へ来る人とても大底たいていはそれと思しめせ、これでも折ふしは世間さま並の事を思ふて恥かしい事つらい事情ない事とも思はれるも寧いっそ九尺二間でも極きまつた良人おつとといふに添うて身を固めようと考へる事もござんすけれど、それが私は出来ませぬ、

それかと言つて来るほどのお人に無愛想もなりがたく、可愛いの、
 いとしいの、見初みそめましたのと出鱈目でたらめのお世辞をも言はねばならず、
 数の中には真まにうけてこんな厄種やくざを女房にようぼにと言ふて下さる方も
 ある、持たれたら嬉しいか、添うたら本望か、それが私は分りま
 せぬ、そもその最初はじめから私は貴君が好きで好きで、一日お目に
 かからねば恋しいほどなれど、奥様にと言ふて下されたらどうで
 ござんしよか、持たれるは嫌なり他処よそながらは慕はしし、一口
 に言はれたら浮気者でござんせう、ああこんな浮気者には誰たれが
 したと思召おほしめす、三代伝はつての出来そこね、親父おやぢが一生もかなしい
 事でござんしたとてほろりとするに、その親父さむはと問ひかけ
 られて、親父は職人、祖父ぢぢいは四角な字をば読んだ人でござんす、

つまりは私のやうな氣違ひで、世に益のない反古紙ほごがみをこしらへしに、版をばお上かみから止められたとやら、ゆるされぬとかにて斷食して死んださうに御座んす、十六の年から思ふ事があつて、生れも賤しい身であつたれど一念に修業して六十にあまるまで仕出しで來したる事なく、終は人の物笑ひに今では名を知る人もなしとて父が常住なげ歎いたを子供の頃より聞知つておりました、私の父といふは三つの歳としに椽えんから落て片足あやしき風になりたれば人中に立まじるも嫌やとて居職いしよくに飾かざりの金物かなものをこしらへましたれど、氣位たかくて人愛じんあいのなければ鼻負ひいきにしてくれる人もなく、ああ私が覚えて七つの年の冬でござんした、寒中親子三人ながら古裕衣ふるゆかたで、父は寒いも知らぬか柱に寄つて細工物に工夫をこらすに、母

は欠けた一つ竈ペツついに破れ鍋なべかけて私にさる物を買ひに行けといふ、
 味噌こし下げて端はしたのお錢あしを手に握つて米屋の門かどまでは嬉しく駆
 けつけたれど、帰りには寒さの身にしみて手も足も亀かじかみたれば
 五六軒隔てし溝板どぶいたの上の氷にすべり、足溜あしだまりなく転こける機はづみ会
 に手の物を取落して、一枚はづれし溝板のひまよりざらざらと翻こぼ
 れ入れば、下は行水ゆくみづきたなき溝泥どぶどろなり、幾度いくたびも覗のぞいては見
 たれどこれをば何として拾はれませう、その時私は七つであつた
 れど家の内うちの様子、父ちち母ははの心をも知れてあるにお米は途中で落
 しましたと空からの味噌こしさげて家には歸られず、立たつてしばらく泣
 いていたれどどうしたと問ふてくれる人もなく、聞いたからとて
 買てやらうと言ふ人は猶なほ更さらなし、あの時近処に川なり池なりあ

らうなら私は定し^{さだめ}身を投げてしまひましたろ、話しは誠の百分一、私はその頃から気が狂つたのでござんす、^{かへ}販りの遅きを母の親案じて尋ねに来てくれたをば時機^{しほ}に家へは戻つたれど、母も物いはず父^{てておや}親も無言に、誰れ^た一人私をば叱^{しか}る物もなく、家^{うち}の内森^{しん}として折々溜^{ためいき}息の声のもれるに私は身を切られるより情なく、今日は一断食にせうと父の一言いひ出すまでは忍んで息をつくやうで御座んした。

いひさしてお力は溢^{あふ}れ出^{いづ}る涙の止め難ければ紅^{くれな}ひの手巾^{はんけち}かほに押当てその端を喰ひしめつつ物いはぬ事小半^{こはんとき}時、坐には物の音もなく酒の香したひて寄りくる蚊のうなり声のみ高く聞えぬ。顔をあげし時は頬^ほに涙^ほの痕^{あと}はみゆれども淋しげの笑みをさへ寄

せて、私はその様な貧乏人の娘、氣違ひは親ゆづりで折ふし起るのでござります、今夜もこんな分らぬ事いひ出してさぞ貴君御迷惑で御座んしてしよ、もう話しはやめまする、御機嫌に障つたらばゆるして下され、誰れか呼んで陽氣にしませうかと問へば、いや遠慮は無沙汰、その父親^{てておや}は早くに死^なくなつてか、はあ母^かさんが肺結核といふを煩^{わづら}つて死^{なく}なりましてから一週忌の来ぬほどに跡を追ひました、今居りましても未^まだ五十、親なれば褒めるでは無けれど細工は誠に名人と言ふても宜^よい人で御座んした、なれども名人だとして上手だとして私等が家のやうに生れついたは何にもなる事は出来ないので御座んせう、我身の上にも知られますると物思はしき風情^{ふぜい}、お前は出世を望むなと突^{だしぬけ}然に朝之助に言はれて、

ゑツと驚きし様子に見えしが、私等が身にて望んだ処が味噌こしが落^{おち}、何の玉の輿^{たま}までは思ひがけませぬといふ、嘘^{うそ}をいふは人に依^よる始めから何も見知つてゐるに隠すは野暮の沙汰ではないか、思ひ切つてやれやれとあるに、あれそのやうなけしかけ詞^{ことば}はよし
て下され、どうでこんな身でござんするにと打しほれて又もの言はず。

今宵もいたく更^ふけぬ、下坐敷の人はいつか歸りて表の雨戸をたてると言ふに、朝之助おどろきて歸り支度するを、お力はどうでも泊らするといふ、いつしか下駄をも蔵^{かく}させたれば、足を取られて幽霊ならぬ身の戸のすき間^{いづ}より出る事もなるまじとて今宵は此^こ処^こに泊る事となりぬ、雨戸を鎖^{とぎ}す音一しきり賑^{にぎ}はしく、後^{のち}には透

きもる燈ともしび火のかげも消えて、唯軒下を行かよふ夜行の巡査の靴音のみ高かりき。

七

思ひ出したとて今更にどうなる物ぞ、忘れてしまへ諦あきらめてしまへと思案は極きめながら、去年の盆には揃そろひの浴衣ゆかたをこしらへて二人一処に蔵前くらまへへ参詣さんけいしたる事なんと思ふともなく胸へうかびて、盆に入りては仕事に出る張はりもなく、お前さんそれではならぬぞへと諫いさめ立てる女房の詞ことばも耳うるさく、エエ何とも言ふな黙つてゐるとて横になるを、黙つてゐてはこの日が過すぐされませぬ、身体からだ

が悪るくば薬も吞むがよし、御医者にかかるも仕方がなけれど、お前の病ひはそれではなしに氣さへ持直せば何処どこに悪い処があるう、少しは正氣になつて勉強をして下されといふ、いつでも同じ事は耳にたこが出来て氣の薬にはならぬ、酒でも買て来てくれ氣まぎれに吞んで見やうと言ふ、お前さんそのお酒が買へるほどなら嫌やとお言ひなさるを無理に仕事に出て下されとは頼みませぬ、私が内職とて朝から夜よにかけて十五錢が関の山、親子三人口おも湯も満足には吞まれぬ中で酒を買へとは能く能くお前無茶助むちやすけになりなさんした、お盆だといふに昨日きのふらも小僧には白玉一つこしらへても喰べさせず、お精しょうれう靈たまさまのお店たなかざりも拵こしらへくれねば御燈明おとうめう一つで御先祖様へお詫わびを申まをてゐるも誰たが仕業だとお

思ひなさる、お前が阿房^{あほう}を尽してお力づらめに釣られたから起つた事、いふては悪るけれどお前は親不孝子不孝、少しはあの子の行末をも思ふて真人間になつて下され、御酒^{ごしゆ}を呑で気を晴らすは一時^{とき}、真から改心して下さらねば心元なく思はれますとて女房打なげくに、返事はなくて吐息折々に太く身動きもせず仰^{あほのき}向ふしたる心根の愁^{つら}さ、その身になつてもお力が事の忘れられぬか、十年つれそふて子供^{もう}まで儲けし我れに心かぎりの辛苦^{くろう}をさせて、子には檻^{ぼろ}樓を下げさせ家としては二畳一間のこんな犬小屋、世間一体から馬鹿にされて別物にされて、よしや春秋^{はるあき}の彼岸^{ひがん}が来ればとて、隣近処に牡丹^{ぼたん}もち団子と配り歩く中を、源七が家へは遣^やらぬが能い、返礼が気の毒なとて、心切^{しんせつ}かは知らねど十軒長屋の一

軒は除^のけ物、男は外出^{そとで}がちなればいささか心に懸るまじけれど女
 心には遣る瀬のなきほど切なく悲しく、おのづと肩身せばまりて
 てうせき
 朝夕の挨拶^{あいさつ}も人の目色を見るやうなる情なき思ひもするを、
 それをば思はで我が情婦^{こひ}の上ばかりを思ひつづけ、無情^{つれな}き人の心
 の底がそれほどまでに恋しいか、昼も夢に見て 独^{ひとりごと}言にいふ情
 なさ、女房の事も子の事も忘れはててお力一人に命をも遣る心か、
 浅ましい口惜^{くちを}しい愁^つらい人と思ふに中々言葉は出^{いで}ずして恨みの露
 を目の中にふくみぬ。

物いはねば狭^{いゑ}き家^{うち}の内も何となくうら淋しく、くれゆく空のた
 どたどしきに裏屋はまして薄暗く、燈火^{あかり}をつけて蚊遣^{かや}りふすべて、
 お初は心細く戸の外をながむれば、いそいそと帰り来る太吉郎の

姿、何やら大袋を両手に抱へて母さんかか母さんこれを貰つて来た
と莞爾にっことして駆け込むに、見れば新開の日の出やがかすていら、
おやこんな好いお菓子を誰れに貰つて来た、よくお礼を言つたか
と問へば、ああ能くお辞儀をして貰つて来た、これは菊の井の鬼
姉さんがくれたのと言ふ、母は顔色をかへて図太い奴めがこれほ
どの淵ふちに投げ込んで未だいぢめ方が足りぬと思ふか、現在の子を
使ひに父さんととの心を動かしに遣しおる、何といふて遣したと言へ
ば、表通りの賑やかな処に遊んでゐたらば何処のか伯父さんと一
処に来て、菓子を買つてやるから一処にお出といつて、我らおいは入
らぬと言つたけれど抱いて行つて買つてくれた、喰べては悪るい
かへとさすがに母の心を斗りはかかね、顔をのぞいて猶予ゆうよするに、あ

あ年がゆかぬとて何たら訳の分らぬ子ぞ、あの姉さんは鬼ではないか、父さんを怠惰者^{なまけもの}にした鬼ではないか、お前の衣類^{べべ}のなくなつたも、お前の家のなくなつたも皆あの鬼めがした仕事、喰^{くら}ひついても飽き足らぬ悪魔にお菓子を貰つた喰^いべても能いかと聞くだけが情ない、汚^{むさ}い穢^{むさ}いこんな菓子、家へ置くのも腹がたつ、捨^{すて}てしまいな、捨ておしまい、お前は惜しくて捨てられないか、馬鹿野郎めと罵^{ののし}りながら袋をつかんで裏の空地^{なげい}へ投^だ出せば、紙は破れて転^{まろ}び出る菓子の、竹のあら垣打こえて溝^{どぶ}の中にも落込むめり、源七はむくりと起きてお初と一声大きくいふに何か御用かよ、尻目^{しりめ}にかけて振むかふともせぬ横顔を睨^{にら}んで、能い加減に人を馬鹿にしろ、黙つてゐれば能い事にして悪口雑言は何の事だ、知^{しつた}

ひと

人なら菓子位子供にくれるに不思議もなく、貰ふたとて何が悪い、馬鹿野郎呼はりは太吉をかこつけに我れへの当こすり、子に向つて父親てておやの讒訴ざんそをいふ女房氣質かたぎを誰れたが教へた、お力が鬼なら手前は魔王、商売人のだましは知れてゐれど、妻たる身の不貞てくさ腐れをいふて済むと思ふか、土方をせうが車を引かうが亭主は亭主の権がある、氣に入らぬ奴を家には置かぬ、何処へなりとも出てゆけ、出てゆけ、面白くもない女郎めらうめと叱りつけられて、それはお前無理だ、邪推が過る、何しにお前に当つけよう、この子が余り分らぬと、お力の仕方が憎くらしさに思ひあまつて言つた事を、とツこに取つて出てゆけとまでは慘むごう御座んす、家の為をおもへばこそ氣に入らぬ事を言ひもする、家を出るほどならこん

な貧乏世帯の苦勞をば忍んではゐませぬと泣くに貧乏世帯に飽きがきたなら勝手に何処なり行つて貰はう、手前が居ぬからとて乞食にもなるまじく太吉が手足の延ばされぬ事はなし、明けても暮れても我れが店おろしかお力への妬み、つくづく聞き飽きてもう厭やに成つた、貴様が出ずば何ら道同じ事をしくもない九尺二間、我れが小僧を連れて出やう、さうならば十分に我鳴り立る都合もよからう、さあ貴様が行くか、我れが出ようかと烈しく言はれて、お前はそんなら真実に私を離縁する心かへ、知れた事よと例の源七にはあらざりき。

お初は口惜しく悲しく情なく、口も利かれぬほど込上る涙を呑込んで、これは私が悪う御座んした、堪忍をして下され、お

力が親切で志してくれたものを捨てしまつたは重々悪う御座いました、成程お力を鬼といふたから私は魔王で御座んせう、モウいひませぬ、モウいひませぬ、決してお力の事につきてこの後ごとかく言ひませず、蔭かげの噂うはさしますまい故離縁ゆゑだけは堪忍して下され、改めて言ふまでは無けれど私には親もなし兄弟もなし、差配の伯父なかうどさんを仲人なかくどなり里なりに立てて来た者なれば、離縁されての行き処とはありませぬ、どうぞ堪忍して置いて下され、私は憎くかろうとこの子に免じて置いて下され、謝りますとて手を突いて泣けども、イヤどうしても置かれぬとてその後は物言はず壁に向ひてお初が言葉は耳に入いらぬ体、これほど邪慳じやけんの人ではなかりしをと女房あきれて、女に魂を奪はるればこれほどまでも浅ま

しくなる物か、女房が歎きは更なり、遂つひには可愛かわゆき子をも餓へ死させるかも知れぬ人、今詫わびたからとて甲斐かひはなしと覚悟して、太吉、太吉と傍へ呼んで、お前は父ととさんの傍と母かかさんと何処どこが好い、言ふて見ろと言はれて、我おいらはお父とつさんは嫌い、何にも買つてくれない物と真まつ正しょう直ぢきをいふに、そんなら母さんの行く処へ何処へも一処に行く気かへ、ああ行くともとて何とも思はぬ様子に、お前さんお聞きか、太吉は私につくといひまする、男の子なればお前も欲しからうけれどこの子はお前の手には置かれぬ、何処までも私が貰つて連れて行きます、よう御座んすか貰ひまするといふに、勝手にしろ、子も何も入らぬ、連れて行きたくば何処へでも連れて行け、家うちも道具も何も入らぬ、どうなりともしろと

て寐ねころ転びしまま振向んとせぬに、何の家も道具も無い癖に勝手にしろもないもの、これから身一つになつて仕たいままの道楽なり何なりお尽しなされ、もういくらこの子を欲しいと言つても返す事では御座んせぬぞ、返しはしませぬぞと念を押して、押入れ探ぐつて何やらの小風呂敷とりいだ取出し、これはこの子の寐ね間ま着きの袷あはせ、はらがけと三尺だけ貰つて行まする、御酒の上といふでもなければ、醒さめての思案もありますまいけれど、よく考へて見て下され、たとへどのやうな貧苦の中でも二人双そごつて育てる子は長者の暮しといひまする、別れば片親、何につけても不憫ふびんなはこの子とお思ひなさらぬか、ああ腸はらはたが腐た人は子の可愛さも分りはすまい、もうお別れ申ますと風呂敷さげて表へ出いづれば、早くゆけゆけとて

呼かへしてはくれざりし。

八

魂^{たままつ}祭り過ぎて幾^{いくじつ}日、まだ盆^{ぼんち}提燈^{ようちん}のかげ薄淋^{はくりん}しき頃、新開の町を出し棺二つあり、一つは駕^{かご}にて一つはさし担^{かつ}ぎにて、駕は菊の井の隠居処よりしのびやかに出ぬ、大路に見る人のひそめくを聞けば、あの子もとんだ運のわるいつまらぬ奴に見入れて可愛さうな事をしたといへば、イヤあれは得心づくだと言ひまする、あの日の夕暮、お寺の山で二人立ばなしをしてゐたといふ確かな証人もござります、女も逆上^{のぼせ}てゐた男の事なれば義理にせまつて

遣つたので御座ろといふもあり、何のあの阿魔あまが義理はりを知ら
 うぞ湯屋の歸りに男に逢あふたれば、さすがに振はなして逃る事も
 ならず、一処に歩いて話しはしてもゐたらうなれど、切られたは
 後袈裟うしろげさ、頬ほ先うさきのかすり疵きず、頸筋くびすぢの突疵つききずなど色々あれども、
 たしかに逃げる処を遣られたに相違ない、引かへて男は美事な切
 腹ふとん、蒲団ふとんやの時代からさのみの男と思はなんだがあれこそは死しに
 花な、ゑらさうに見えたといふ、何にしる菊の井は大損であらう、
 かの子には結けつ構こうな旦那がついた筈はず、取にがしては残念であらう
 と人の愁うれひを串じようだん談たんに思ふものもあり、諸説みだれて取止めた
 る事なけれど、恨うらみは長し人魂か何かしら筋を引く光り物のお寺
 の山といふ小高き処より、折ふし飛べるを見し者ありと伝へぬ。

青空文庫情報

底本：「にいりえ・たけくらべ」新潮文庫、新潮社

1949（昭和24）年6月30日発行

2003（平成15）年1月10日116刷改版

2008（平成20）年6月10日128刷

初出：「文芸倶楽部」

1895（明治28）年9月号

※このファイルには、以下の青空文庫のテキストを、上記底本に
そって修正し、組み入れました。

「にいりえ」（入力：青空文庫、校正：米田進、小林繁雄）

※底本巻末の編者による語注は省略しました。

入力：酔いどれ狸

校正：岡村和彦

2014年11月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

にごりえ

樋口一葉

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>